

## 世界自然遺産白神山地・屋久島における循環型経済社会の構築

本論文は世界自然遺産と循環型経済社会構築の関係と可能性を、日本初の世界自然遺産登録地である白神山地および屋久島を研究対象に検証することを目的とした。白神山地では、過疎対策のため林道という公共事業に頼り、遺産登録後はその林道を「白神山地まで入れる観光道路」として経済発展のために活用している秋田県の八森町に、屋久島では二つの町を含む屋久島全体に焦点を当てた。

研究に際しては地元住民や関係者への聞き取り調査及び各種報告書等文献の情報収集に拠った。その結果、世界遺産の登録は大いなる差別化をもたらしたものの、経済効果は地元の期待を下回っていたことが明らかになった。地元住民への取材では世界遺産を誇りにする一方で、期待するほどの効果をもたらさない観光業への不満や、過剰利用に伴う自然破壊への懸念、世界遺産との距離感などの問題が浮かび上がった。世界遺産は地元住民だけのものではない。しかし、自然の恵みを生活の基盤とし、その自然を前面に出して地域の活性化を図りたい過疎地に振り、世界遺産は認知度の飛躍的向上による来訪者の増加という効果を見たものの、地域経済の発展を求めるには不十分で、むしろ管理という制約を課せられる重い存在でもあった。

そこで本論文では環境マネジメントの手法により、自然環境や資源を損なうことなく持続可能な経済社会を実現させる方法として、世界遺産を軸にしたツーリズムの促進と独自産業集団の育成を考えた。世界遺産の活かし方は一つではなく、地域の特性により異なっていた。白神山地では、白神山地の森の土壌菌をベースとした農とバイオテクノロジーの産業振興による世界遺産ブランドの訴求と販路の拡大を、屋久島では、自己完結型のクリーンな循環型社会を築き、環境シンクタンクの嶋として環境産業を誘致する方法を提案した。

今求められていることは経済の継続的发展のみならず、地域の自然資源を枯渇させず循環的に使用しながら振興をはかる決意と実行である。世界遺産の登録を新たな地域振興の機会と捉え、自然と文化に根ざした独自の循環型社会を構築する試みは、日本が世界に提言する新たな世界遺産の意義であり、また西洋の価値観に自然と文化を融合させる東洋型の価値観、東洋間を織り込む提案でもある。